

転生したらチートすぎて  
逆に怖い 2

MAIN CHARACTER  
登場人物紹介

リーベ・フリードリヒ &  
エルピス・フリードリヒ

フリードリヒ公爵家の双子。  
フィエルテを溺愛する光と影のような存在。

ディライト  
・プレゼントリー

フィエルテの「運命の番」。  
少々自分に自信がない。

ネオス

王国の第二王子。  
光魔法の使い手。

ジュール  
・フリードリヒ

フリードリヒ公爵家三男。  
大人しいが、植物を育てる天才。

ルアアパル

フィエルテと契約したムーンウルフ。  
普段は彼女の影に住んでいる。

フィエルテ  
・フリードリヒ

お詫びチートで、無限の魔力を持つ幼女。  
パワフルに異世界を満喫中！

プロローグ　フィエルテ・フリードリヒ

思い返すこと、五年と少々。

フィエルテ・フリードリヒ、六歳です！

四人の弟妹を持つて働きづめの人生を送っている最中に、私は神様のミスというイレギュラーな死によってこの世界に生まれ落ちた。

そのお詫びとして神様からもらったのは「努力次第でなんにでもなれるチート」と「受け止めきれないほどの愛」。

そうして私はフリードリヒ公爵家の娘として生まれ、最強で最高の家族に出会った。そしてムーンウルフのル AAPalとも出会い、この世界で元気いっぱいに生きている。

さらに、この世界には魔法と精霊が存在する。

魔法は六つの属性に分かれていて、精霊は属性ごとに色が違う。炎の赤、水の青、風の緑、土の茶、光の金と闇の黒。手のひらサイズのカラフルな彼らは子供にトンボのような<sup>はね</sup>が生えた姿をしている。どの子も小さな子供のようにどんなことにも興味津々で、やや飽きっぽい。人型をしているとはいえ人間じゃないから、感情のままに行動することが多くてたまに残酷だ。

その結果、村を滅ぼしたなんて歴史すら残っているけど、自分が好む相手のためには一生懸命行動するから根はすごい子たちだと言っている。

私には神様からのお詫びチートがあったせいで、精霊たちからよくちよっかいを出されていた。ただ、精霊たちを自分の目で認識するためには、魔力鑑定というものをしなければならなかったから六歳までは謎の存在だったただけだね。

そんな魔力鑑定式ではルナという友人までできて、とっても嬉しかった。

ルナはフォルトゥナ商会という大商会の娘で、とっても目利きの女の子だ。

特にこの世界では砂糖でものごく甘くしたお菓子しか食べられないから、ルナのおうちが取り扱っているフルーツが私にとっての救世主だったよ……！

ルナのおうちは王家御用達の人気商会だから扱っているフルーツもすごく美味しい。さっぱり食べられるフルーツって最高だよね……！！

そんな感じで、新しい私の人生はチートすぎて怖いぐらいだったんだけど、五歳児ではやれることも限られていて、もどかしい思いをしたことも一度や二度ではない。

それでも、これから成長していこうって決めて、このフリードリヒ公爵家であることを探している。

神様から無限の魔力をもらったのはいいけれど、この世界では魔力を五歳になるまで感じ取れなかったし、魔法を使いこなせるようになるのはもっと後の話だった。

でも、「努力次第でなんにでもなれる」ってことはこれからだよね！

そんな訳で、今はちよつと感情に引きずられやすくて熱を出しやすい体を改善中だ。

体がもう少し丈夫になったら、いっぱい愛してくれている家族に何かお返しができるように、お金が稼げないかな、なんて思っているんだけど……

「フィル、考え事？」

「ん、ちよつと今までのことを思い出していた」

つん、と頬を突かれて振り向くと、ディライト——ディーが私を見ていた。

狐と兎獣人の血を引く彼は、もふもふの狐耳を持っている。それがちよつと心配そうに動いているのを見て、私は彼にもたれかかった。

「この一年いろんなことがあったもんね」

ディーはそんな私を見て優しく微笑むと、ぽふぽふと頭を撫でてくれる。

彼は私の『運命の番』だ。

六歳なのに運命なんて……と思うけど、『誰かに強く愛されたい』という願いを神様が叶えてくれたのだ。

ひよんなことから出会った彼は複雑な事情を抱えていた。病気がちなシオン兄様と、獣人の血が混じるディーを蔑む家族——それらの問題が解決した今は、実家であるプレザントリー家を立て直すために奔走している。

「ディーとシオン兄様はこれからまだ忙しい？」

「そうだね……これからしばらくはあんまり会えなくなっちゃうかもしれない」

その言葉と共に、デイーがぎゅっと私を抱きしめる。

デイーの可愛さに内心ときめきつつも、私はデイーを振り返った。

「でも、それが終わったらずっと一緒にいられるでしょ？」

「うん。そう思って頑張るよ」

私の言葉を聞いてデイーの尻尾がぼふぼふと揺れる。よかった、喜んでくれたみたい。

ずっと忙しかったから今日ぐらいいはゆつくり……と思った時、突然バチツと大きな音がした。

窓の方からだ。その音と同時にデイーが私を窓から遠ざけるように抱き上げて、目を凝らす。

「何か入ってきたみたい。『カラス』が追ってるのかな？ 少し木が揺れてる」

「侵入者？」

「おそらくね」

そう言って辺りを警戒する姿は、プロそのものだ。

じっとしていると、ピリツとした感覚が体を巡った。静電気かと思ったけどなかなか治まらない。

「っ、ピリピリするかも？」

「大丈夫!? ……ああ、相手の魔力に当てられたんだね、カラスが自分の魔力をルティに当てるよ

うなへまをする訳がないし……少しだけ我慢できる？ 多分すぐ終わると思うから」

こくと頷いてデイーにそっと寄り添う。

フリードリヒ公爵家はこの国の宰相であるお父様が当主で、この国で国王陛下に次いで力を持っていると言っても過言ではない。

だから敵も少なくはないのだ。

『カラス』と呼ばれているのは、我が家を守ってくれている国の暗部『オルニス』のこと。『オルニス』はフリードリヒ公爵家が立ち上げた部隊だ。ちなみにデイーもその一員だったりする。

彼らが追いかけているということはつまり、我が家に忍び込もうとした暗殺者か何かなんだろう。息を詰めてしばらくじっとしていると、そのピリピリする感覚は遠のいていき、何事もなかったかのように部屋は静まり返った。

デイーも体の力を抜き、時計を見上げる。

それから「あ」と小さく声を漏らした。

「ルティ。そう言えば、明日はリーベさんたちの学校の文化祭に行くんじゃないかな？ こんなに遅くまで起きていて大丈夫？」

今日もミルク色の髪がさらさらとしていて綺麗……と見惚れてから、私は目をぱちくり。

唐突に日常全開なことを言われたことからっていうのもあるけど……

「え!？」

「リーベさんがそう仰っていたけど……」

「ぎ、聞いてないよ!？」

私は慌てて、窓の外を見る。すっかり遅くなってしまっていて、窓の外は真っ暗だ。

お母様とお父様はまだお仕事で帰ってきていないけど、確かにいつもならそろそろ家にいるはずの兄様たちも帰ってきていない。



も、もしかして学園祭の準備があるから!?

このまま寝ずに待っていたら怒られてしまいそうだ。きつとうっかりやなお母様やお兄様は私に伝えるのを忘れていたんだろう。

そうだとしたら、明日は早起しなきゃじゃない!

「――僕は念のためリーベさんたちにご連絡しておくから!」

そう言ってくれるディーにお礼とおやすみを言って、慌てて私は自分の部屋に戻り、ベッドに飛び込んだ。自分の影に向かってルアアパルを呼ぶ。

ディーの家族であるプレザントリー家の事件があつてからというもの、ディーとシオン兄様は元の屋敷に戻り信頼できる使用人とそうでないものを分けたり、その不足を補うための人選を行ったりと忙しい。

だから今日は久しぶりにディーとゆっくりできると思ったのに……!

「ル、ルア!」

『どうした?』

すると影から大きくてもふもふの白銀の狼がすりりと顔をのぞかせる。彼がルアアパル――通称ルアだ。片耳だけ黒く、瞳に浮かぶ三日月は大きさに似合わず可愛いチャームポイントだ。

「明日、私が起きてなかったら起こしてほしいの……!」

『頼まれよう』

「ありがとう!」

もっふりとした白くて綺麗な毛皮は毎日の手入れのおかげでとても綺麗な。ルアは少し呆れた口調だったが、私がギュッと抱きしめるとその温かな体で私を包んでくれる。

うう……文化祭、楽しみだなあ……！

もしかしたら眠れないかもしれない、と思っていたけれど、ルアに優しく尻尾で体を撫でられているうちに私の意識は闇に溶けていった。



「ま、間に合った……！」

『おお、自分で起きて素晴らしいな、フィエルテ』

「ありがとう！」

翌日、私はなんとか起床することに成功した。

ルアも何度か他の部屋には届かない程度に吠えることで、私を起こそうとしてくれたらしい。

ただ、残念ながらディーは私の寝ている間にまたプレザントリーの屋敷に戻ってしまったようで、無事の起床を祈るお手紙がそつと机に置かれていた。

寂しいけど、私とディーはお互いの心を『結んで』いるから、ぎゅつと手紙を胸に当てると、ディーが今も私のことを想ってくれていることが分かる。

「お土産いっぱい買ってこようね！」

『そうだな、ディライトも喜ぶだろう』

ルアはそう言って尻尾を一つ振った。

それから「早起きですね」とメイドのリリアに言われながら、大急ぎで準備をする。

なんとか、我が家の前にお迎えの馬車が来る前に私は準備を終わらせることができたのだった。

足早に部屋を出ると、嬉しそうなお父様とお母様が私を待っていた。

「今日は楽しみですね」

「しつかり準備ができていて偉いわ。たくさん楽しみましょうね」

国のお仕事を一手に担うお父様とお母様は、無理やり今日のお休みをもぎ取ったらしい。

笑顔で私の手を握ってくれた。

……私に学園祭の連絡ができなかったのも、ぎりぎりまでお仕事をしていたせいだというから仕方ない。私は大きく頷いて、馬車に乗り込んだ。

## 第一章 初めての学園祭

「うわぁ……！」

目の前に広がる鮮やかな光景に目を奪われる。

そのワクワクを誰かに伝えたくて振り返ると、私のことを微笑ましそうに見つめるお父様とお母様がいた。

ちよつと恥ずかしくなつてもう一度周囲を見回す。

王宮みたいに大きくて広い建物全体が色とりどりの花やリボン、フラッグなどで彩<sup>いろど</sup>られている。それに魔法かな？ 空を見上げればたくさんの紙吹雪や花吹雪が舞っていた。

本当に夢のように素敵な光景だ。

さらに大きな門をくぐると、たくさん露店が並んでいて目移りしてしまう。

「ふふ、すごいでしょう？」

「はい！ 全部キラキラしてて、たくさんの方がいてすごいです」

「フィル、はしゃぐ姿も可愛いですが危ないですよ。入学前に将来入る学園で転ぶなんて先生に見られたら恥ずかしいでしょう？」

「気をつけます！」

お父様からの忠告は聞かえているが、どうしても興奮が抑えられない。

王立学園プリムールの学園祭は年に一度の学園の一大イベントでとても有名だそうだ。

プロではない生徒が出すお店なのにそのどれもが学生とは思えないクオリティのものが多く、王都に住む多くの人たちから愛されている。

作成者がプロではないからこそ、安く販売されている魔道具は特に平民の人達に大人気だ。

学生たちも自分たちが作った製品を買ってもらえるから、さらなる材料費の獲得や、将来のパトロンの見つけることができるチャンスらしい。

でもやっぱり貴族が多く通う学園だから、警備上の問題もあって学園祭に参加できる人数は決まっている。この学園に通う生徒の家族と抽選で当選した人達が学園祭に参加できるようになっていると兄様が言っていた。

もちろん私は今回、家族枠で参加している。うちは今三人のお兄様たちがこの学園に通っているからね。

きらきらと輝く景色に目を奪われながらも、お母様を振り向く。

「お兄様たちのお店楽しみですよ！」

「ふふ、そうね。あの子たちは自由時間を揃えたと言っていたし、先にあの子たちのお店に行きましようか。その後あの子たちが休憩に入ったら皆で他の場所を回りましょう」

「そうですね。私たちが参加できるイベントもあるようですし、それまでは学園の見学も兼ねてお父様が色々教えてあげますからね」



「ありがとうございます！ お父様！」

嬉しくなつてぎゅつと抱きつくと、お父様の顔がでれつと緩んだ。

そういえば、最近お父様が私のスキンシップが減つたつて嘆いていたっけ……

そんなことはないとは思うんだけど、ディーがいたらディーにくつつきたくなくなってしまふから、この頃はお父様にくつつく頻度が下がつていたかもしれない。

無意識にディーにばかり甘えていたかと思うと恥ずかしい。

ディーに八つ当たりして、お母様に怒られるお父様は可哀想だし。

今日はお父様とお母様と一緒にいっばい楽しもうかな。

「まずはリーベとエルピスのところに行きましようか」

「はい！」

お父様とお母様と手を繋いで、双子の兄様——リーベ兄様とエル兄様のところへ向かう。

背の高い二人に挟まれるとたまに浮いているみたいになつてしまふ。夫婦仲がいい二人は私の憧れだから、私としては二人が手を繋ぐところが見たかったんだけど……

そんなことを考えながら歩いていけば着いたみたいだ。

「フィルー！ 元氣か？ 気持ち悪くなつたりしてないか？」

「リーベ兄様！」

大きな声で私を呼びながらリーベ兄様が近づいてくる。今日もお父様と同じ銀の髪がとっても素敵で、綺麗なピアスが耳元で揺れていた。

どうやら私が魔力酔いを起こしているんじゃないかって心配をしているようだ。

今日は周囲に人も多いので、魔力酔いを止めるあの苦い薬を飲んできた。だから大丈夫ですよーと言つて抱きつく。

するとリーベ兄様はギュッと抱きしめ返してくれた。そうしていればエル兄様がため息をつきながら、こちらに走り寄つてくる。

「リーベ、他の人もいるんだからあんまり大きい声で叫んじゃダメだよ」

「大丈夫だつて。お前は固いんだよ、エル。みんなも結構はしゃいでるし」

「まったく……リーベはいつもそうなんだから」

お父様に似た銀髪のリーベ兄様と、同じ銀髪だけど、お母さんに似たピンクのグラデーションが入った髪を持つエル兄様。二人はとっても対照的な見た目と性格を持っている。いわば陰と陽、光と闇みたいな。

だからたまに喧嘩をしているんだけど……

ふむ。

トタトタとお兄様たちに近づく。それからぎゅつと二人の手を握つて、上目遣いで顔を見上げる。

「二人とも、喧嘩は……だめ、です！」

「っ、なんて可愛いんでしょう!？」

ちよつとお父様はお静かにお願いしたい。

別に今の会話は喧嘩つてほどじゃないけど、せつかくの楽しい日だからずっと笑つてほしい

じゃん。

だからお兄様たちが言い合う前に止めなきゃと思った次第だ。

普段は仲良しだけど、この頃は学園祭間近で忙しかったからか二人ともビリビリしていたみたいで、時折家の中で魔力がぶつかりあっているような気配がしていた。元々正反対の性格の二人だからぶつかる時はすごく大きくぶつかっちゃうんだよね。

……家が所々壊されるレベルで。

びっくりするのでそれはやめてほしい。

我が家はみんな魔力量が多いから、感情が昂<sup>たかふ</sup>ると周りに影響が出てしまう。だからこそ魔力操作をしつかり学んで、何かあった時の被害を最小限に抑えられるようにしているんだけど、やっぱり心の操作は難しい。

どんなに魔力操作を完璧にしたって、人間は感情に影響されやすい。だからこそ魔力操作は基本だけど一番大切で一番難しいとお母様に教えてもらった。それでもしつかり感情を抑えられる両親は私の目標だ。

私はまだ魔力操作を習っていないけど、もうすぐ教えてもらえるようになる。

私もただでさえ泣きやすい体なので、魔力と一緒にコントロールできるようになったらいんだけど……！

色々考えていると、エル兄様とリーベ兄様は私にじっと見られ続けてだんだん居心地が悪くなってきたらしく、あわあわと手を動かしている。

「ご、ごめんねフィル」

「……あー、わりい。せっかくの学園祭だしな！ 遊びに来たんだろ？ ほら、これが俺たちのクラスの出し物だぞ！」

そう言つて、二人は今度こそ息びつたりで、チラシのようなものを私に見せた。

魔法がかかっているのか、チラシからはきらきらと燐光が散っていて、『挑戦者募集！ 文武揃えば攻略可能！』という言葉が紙の中にくるりと回っている。

「出し物は迷路。フィル一人だともしかしたら難しいかもしれないけど、父さんと母さんがいるし、絶対楽しめるよ」

「迷路……？」

あっち、と指さされた方を見ると入口から奥がまったく見えない、小さな建物があった。入口の看板に、確かに迷路と書いてある。『文武揃えば攻略可能！』って書いてあるということは頭の良さで力の強さが必要ってことかな？

まるで武勇に優れたリーベ兄様と優しくも聡明なエル兄様をそのまま表したような出し物だ。

「やってみる？」

エル兄様が私の頭を撫でながら聞いてくる。

そうしている間にも楽しそうだけ悔しそうな声を上げて、迷路の出口から人が出てくる。

きつと途中でクリアできずにリタイしたんだろう。

うーん、面白そうだけど、兄様が言う通り、一人じゃ寂しいし難しそうだな。作成者であるお兄

様たちはもちろん参加できないだろうし……お父様たちならついてきてくれるかな。

ぎゅっとお父様に抱きついてアピールしてみろ。

「お父様。私、お父様と行きたいです……かっこいいところ見たいです！」

「フィル、お母様は？ お母様の方がきつとすぐ攻略できるわよ？」

「何言ってるんですかアイシャ。フィルは私と行きたいんですよ。お父様のかっこいいところが見たいんです！」

「あら、私だってフィルにかっこいいところを見せたいわ！」

あちゃー、どうやら言い方を間違えちゃったみたいです。

可愛く頬を膨らませるお母様と、なんだか身にまとっている魔力が私の魔力感知にがんがん引っかかってくるお父様。どちらも負けないうようにこっちを見ってくる。

入口で言い合ってるから他の人の視線が気になってしまふ。

ただでさえうちの家族は顔がよすぎて、二人でいても人が寄ってくるのに、今はジュール兄様以外の全員が揃っている。そもそも宰相であるお父様と、国王陛下の妹で国一番の魔術師であるお母様は注目されるのに……！ そんな二人が子供のように言い合ってるから、さらに注目されまくりだよ。早く中に入らなきゃ！

「じゃ、じゃあ三人でもいい？」

祈るようにエル兄様とリーベ兄様を見上げると、二人は肩をすくめて微笑んだ。

「俺たちもだけど、父上たちがフィルのエスコート役を譲る訳ないしな」

「この頃デライトに取られっぱなしだったから三人でいいと思うよ。……一瞬でクリアされたらどうしようかな、とは思うけどね」

ほっとして今度はお父様とお母様を見上げる。

今度こそ二人は喧嘩をしなかった。

ぎゅっつと二人の手に自分の手を載せれば自然と握ってくれるから、リーベ兄様とエル兄様に案内されて、私たちはそのまま建物の中に入っていく。

中は暗いけど、足元が見えないほどじゃない。夜道にある街灯みたいに、所々壁の辺りが光っている。

入る前にエル兄様に渡された出し物の説明と、リーベ兄様に渡された杖は腰にくくりつけて進む。えっと？ 説明書きに目を落とし勉強したばかりの文字を読み解いていくと、どうやら謎解きをして正しいルートを進みつつ、所々いる門番を倒さないといけないようだ。

門番に挑む方法は様々で、途中リタイアもあるけれど、見事クリアすればこの学園祭で使うことができるクーポンがもらえると書いてある。

なるほど『文武揃えば攻略可能』だね。

一人だけで挑むんじゃなくて、グループで挑戦したら絆が深まるかもしれない。いいゲームだ。さすがお兄様たち！

そう思っ歩き続けていると、分かれ道があった。パッと見、道に違いはなさそうだけどどっちに進めばいいだろう？

二人を見上げると、「フィルの思うがままに進めばいい」という言葉が降ってきた。  
責任重大すぎる……!

「じゃあ、こっちに行きます!」

迷ったときは左に進めって、何かに書いてあった気がするので左へ進む。

すると周りの暗さが一段高まった。足元はぼんやりと光っているので転ぶ心配はないけど、さっきまである程度見えていたお父様とお母様の顔が見えづらい。

「フィル怖くないですか?」

「はい! お父様とお母様がそばにいますので平気です!」

「それならよかった」

お父様がぎゅっと私の手を握ってくれて、ほっとする。

よし、さらに先に進もう! と思った時だった。

目の前にきらきらとした光の渦が立ち上り、ふわりと人の姿に変わる。どうやら生徒がやっているのではなく、精霊か幻覚魔法のような感じだ。

「……あら、これが最初の問題かしら?」

お母様が足を止めると、門番らしきそれが微笑んだ。

『夜が笑う時。笑顔が咲き乱れる。我にその姿を見せよ。』

柔らかな声でその問いが二度繰り返される。最初は頭脳を必要とするみたい。

この門番は問題を出す担当だから倒す必要はないのかな? それにしても夜が笑うってどういう

ことだろう。笑った時に笑顔が咲き乱れるってそもそも矛盾している気がするし、もしかしてそのまま受け取ったらいけないのかな……

いくら考えても分からずお父様をチラッと見上げる。こういうのはお父様が得意だ。

お父様はもちろん剣や魔法も使えるけれど、どちらかと言うと戦略を練ったり、頭を使ったりすることの方が得意だと言っていた。

するとお父様はちょっと悪戯っぽい笑みで私に言った。

『『夜が笑う』』ところをフィルも見ることがあると思うよ」

「えっ?」

ヒント!? 目を見開くと、お母様もあらあらと言って微笑んでいる。

こ、これは二人とも、もう答えが分かかってるんじゃない……

「そうねえ、フィルは夜じゃなくても近くで『笑う』のを二つ見ているかもしれないわ」

お母様が両手の人差し指を私の口の端に当てて、きゅっと持ち上げる。

私の口が自然と笑みの形になって……

「あっ」

思わず、目を瞬かせた。夜にあって、私の近くにある『笑み』の形のもの。

「それってもしかして、三日月のことですか?」

「さすがフィル!」

夜に浮かんだ三日月は、日によって笑みの形に見える。それに私のそばにいるムーンウルフ、ル

アパルの瞳には三日月が浮かんでいる。

お母様たちはそうやって私にヒントを教えてくれていたんだ。  
パスを出されてのシュートだったとしても嬉しいものは嬉しい。  
思わずその場で跳ねると、お父様に撫でられた。

「さて、その先は私が引き受けよう」

そうだった、この先の『笑顔が咲き乱れる』はまだ解けていないんだった。  
でも月がいつばいある訳じゃないし……

頭を悩ませていると、お父様は微笑んでお母様に向き直った。

「アイシャ、スーリールの花を」

「分かったわ」

スーリールの花？ 首を傾げていると、お母様が氷魔法でその場に美しい花を生み出した。ユリのような形をした真つ白な花で、三日月の模様が花びらの先に入っている。

「スーリールっていうのは三日月が出る夜にしか咲かない花のことだね。咲き乱れる、という言葉がヒントだったのかな」

スーリールの花は、言葉通り一輪ではなく群生で咲き乱れるらしい。三日月を笑ってる口元に見立てて、『笑顔が咲き乱れる』つてのがスーリールの花のこと。それを見せるつてことは、スーリールの花をなんらかの形で見せればいってことだったんだね。

お父様に教えてもらって、思わず拍手をしてしまう。

すると、門番は『正解!!』と大きな声で告げて消えていった。

第一関門突破だ。

「お父様すごいです！」

本当にお父様の知識量はすごい。この国の宰相をやっているのは伊達じゃない。宰相は王の一番近くにいて、国王が何かを間違ひそうになった時に諫めることも仕事の内だ。

だからこそ何がダメで何がいいのか、この国のために何が必要なのか、他国との情勢も考えつつ国で問題が起きた時まず一番最初に動かないといけない。

それを判断するために培われたのかこれらの知識なんだろう。

国の事を考えながら、家族のことも考えられるお父様って本当に尊敬できる。

普段の私に対してのデレデレが嘘みたいなのに、こういう時は格好良く見えるんだよなあ。

そうやってお父様を褒めちぎりながら進んでいると、またいくつかの分岐に出会った。

そのたびになんとなくこつちかな？ という方向に曲がっていく。

やがて、また目の前が光り輝き、二人目の門番が現れた。

『周りの物を壊すことなく我のみを倒せ。』と門番が口にする。

今度の門番は一人目と同じように光っていたけれど、出題を終えると同時に姿を変えた。

一見ただの円柱に見える。大理石か何かでできているようなとろりとした質感の白色の大きな柱……どうやら魔力操作が重要になる戦闘みたい。周りのものを壊さない繊細な魔力のコントロールと、この大きな柱を倒せるぐらい強い魔力を操作できるかどうかが求められているようだ。

これはお母様の出番かな？

にこつと笑って、一歩前に出るお母様をじっと見つめる。

魔法の発動から攻撃まで見逃さないようにしつかりと。

お母様の魔法を使う姿は勉強になるってお兄様たちが言っていた。

こういう狭いところで使う魔法ってどんなものがあるのかな？

お母様が一人で円柱の前に立つと、こちらを振り返って微笑んだ。

「フィル、お母様の魔法よく見ててね」

「はいっ！」

ドキドキしていると、お母様のそばに精霊が現れた。同時にふわりとさわやかな風を感じる。

『アイシヤ、久しぶりー！ それにフィルも』

この声は、お母様と契約している風の精霊のリーンだ！ リーンが呼ばれたってことは風魔法かな？ でも室内で風を起こすっていうのは……？

「さあ、リーン。力を貸して」

『なんだか楽しそうなことをしてる！ もちろんいいよお！』

お母様の言葉と共に、小さな竜巻が巻き起こる。

リーンが自分の手のひらに息をふきかけたことで、小さな風の渦ができてくるようだ。リーンがお母様の前にそれを離すと、今度はお母様がその小さな風の渦に魔力を加える。

やがて小さかった竜巻は円柱と同じぐらいの大きさになった。

部屋の中で竜巻を起こせるのはすごいけど、そんなのを起こしたら周りの壁まで壊しちゃうんじゃない？

そうい、一人焦ったけれど、実際は違った。

「あれ？」

竜巻が、円柱を少しずつ削って上から崩していく。けれどお母様の後ろに立つ私たちにはそよ風一つやってこない。ただ、お母様の風の魔力がそこに集中していることだけが分かって思わず見とれてしまった。

「すごいでしょう？ 部屋の中で竜巻を起こすという発想力。小さなものを作るための魔力の込め方。周りに影響を出さないようにするコントロール。あの人が私の妻であり、あなた達の母親なんですよ」

お父様が、誇らしげに愛おしそうにお母様を見つめてる。

「はい……。すごく、すごく綺麗です。お母様すごい……」

そう言っていると、あつという間に門番である円柱が消えていく。

『お見事！』という声だけが最後に響き、ひとかけら残っていた円柱は跡形もなく消えた。

当たり前だけど周りには何一つとして影響は出ていない。

ただ、門番すらいなかったのでは、と思えるほど静かな道が目の前に広がっている。

それに対して、特に疲れた様子もないお母様。あのレベルの魔法を使えるなんてどれだけの努力をしたんだろう。才能だけで到達できるとは思えないくらいすごい魔法だった。

ただでさえ魔力量が多いと魔力量の調整や動かす時の操作が人の何倍も難しいはずなのに、それを簡単にやってのけるなんて。

本当に自慢のお母様だ。

早く、私も早く魔法を使えるようになりたい。お母様みたいなすごい魔法を使えるように。

「さすがですねアイシャ」

「ふふ、フィルのために張り切っちゃったわ。どうだったかしらフィル？」

「すごかったです！ やっぱお母様は私の自慢のお母様です！」

「ふふ。ありがとう」

本当に、自慢のお母様だ。

私たちはまたゆっくりと歩を進めた。

私が選ぶ道の二択を間違えていたのか、何度か見たことのある道に出ることもあったけど、お父様とお母様はまったく怒ることなくもう一つの道に足を進めた。

それから何人かの門番に出くわした。

スフィックスのように謎を出す門番、可愛らしく見えてすぐく足の速い兎型魔獣の捕獲、音楽で作られた謎解き——様々な難関を私たちは突破していく。

『お見事』

そうして、しわがれた声で言ったチェスの騎士のような七人目の門番が消えると同時に、パツと目の前が瞬いた。

わあっと歓声が聞こえる。

辺りを見回すと入口に戻ってきたようだ。外の明るさが目に染みて、何度も瞬きをする。すると首にはいつの間にか、小さなメダルのようなものが下がっていた。

「まさか攻略者が出るなんて……」

お兄様たちのクラスメイトらしき人たちがこちらを見てびっくりしている。

その一方で、お兄様たちが結果は分かっていたとでも言うような苦笑を浮かべて賞品を持ってくる。

文化祭内で使えるクーポン券だ。

ちよつと悔しそうな顔で、リーベ兄様は頭を掻いている。

「あー、やっぱ父さん達には簡単だったかー。結構企画する側の僕たちも趣向を凝らして、難易度も高めにしてたんだけどなー」

「フィルがいるのに格好悪いところは見せられませんかね。しかし番人達——幻覚魔法や、精霊魔法の使い方は見事でしたよ」

「うふふ、私も頑張っちゃったわ！ フィルも頑張ってくれたしね」

「うん！」

謎解きはヒントを出されてばっかりだったけど、兎型魔獣を捕まえるときにはルアを召喚して、一緒に隅っこに兎を追い込んだり、音楽をメモしたり、すごく楽しかった。

そう伝えると、お兄様たちはとても嬉しそうに笑ってくれた。

その光景と何かがダブって、目をこする。

そうだ、前世でも似たようなことをしたんだ。確かあの子の文化祭もこんな感じだったわけ……ふと、前世のことを思い出してしまった。

私には四人の弟妹がいて、一番上の弟が動物好きだった。

クイズをして、よく動物のことを教えてくれたっけ。

この世界で私は本当に優しく愛されている。でもあの子たちは私がいなくなっただ丈夫かな……そう思っていると、誰かに優しく頭を撫でられた。見上げればエル兄様がいた。

「大丈夫？」

「ん……ごめんなさい、大丈夫です！」

慌てて笑顔を作ると、エル兄様は一瞬目を見開いてから微笑んだ。

「フィルは時々、すごく遠くを見ているけど、何かを一人で抱え込む必要はないからね。僕や家族は絶対にフィルの味方だから」

「エル兄様……」

せっかく、学園祭で楽しそうだったのにごめんなさいの気持ちを込めて頭を下げると、大丈夫だよ、と言われてしまう。

それから私の頭をポンポンとひと撫でして、エル兄様はリーベ兄様のところに戻っていった。

「フィル？」

お母様に声を掛けられて、慌てて手を繋ぎなおす。

「どうしましたか？」

「ううん、なんでもないです！」

元気な声を出すと、お母様とお父様は一瞬首を傾げたけど微笑んでくれた。

まだ、私は家族に自分の前世のことを話していない。

話せないのは私の弱さだ。置いてきてしまったあの子たちが心配だけど、どうすることもできないし、今ここにいる家族のことよりも前世を優先しているような自分はあるまいくないんじゃないかって思う。

いつか話せる時がくるかな？ 話せたらいいのにな。

「エル兄様、ありがとう！」

今はせめて、そっとしておいてくれることにお礼を言うべく、私は大きく兄様に手を振った。

それからお兄様たちはクラスの人達に色々引き継ぎをして、私たちと合流してくれた。

次に向かうのはジュール兄様のところだ。ジュール兄様はどんなことをしてるのかな？

学園を飾っている外装の植物を動かしているのはジュール兄様だと前に聞いたけど、部活のほうでも何か出し物を出しているらしい。

きっとジュール兄様の好きな植物関係の何かだと思うんだけど。

お花を売ったりとか？ それともお花の育てかた講座とかかな？ 私も植物は好きだしジュール兄様のお話はすごく面白いから楽しみだ。



あ、でもジュール兄様、家族以外とお話するのは苦手だっけ。大丈夫かな？  
心配しながら今度は、お兄様たちと手を繋いで歩く。

本当は私のことをエル兄様が抱っこしたそうだったけど……それだと誰か一人しかできないからダメなんだって。

また喧嘩がリーベ兄様と始まりそうになったので、妥協案として二人と手を繋ぐことになった。  
父様たちのラブラブ手繋ぎも見れて嬉しい。

背の高い二人と手を繋ぐと正直腕が疲れるから、帰りはエル兄様に抱っこしてもらいたい。  
甘えたことを考えつつ、眩しいほどの景色を見てみると、ふと視線を感じた。

「ん？」

視線を感じた方を向くと、誰かとガッツリ目が合ってしまう。

そこにいたのは見たことのない緑髪の男性だった。なぜか私を見て目をきらきらと……もとい、  
ギラギラさせている。

えと、どちら様？

そう聞こうとした時だった。

「妖精？」

「え？」

「あなたは妖精ですか？ なんの妖精ですか？ あ！ その可愛い見えた目はスイートピーの妖精ですね！ ああ！なんて可愛いんでしょう！」

ぼそりとした呟きの後、ビックリするような速さでその人は私との距離を詰めてくる。

何この人！ 怖いんだけど！

「っ、おにいさま！」

本能的な恐怖に襲われて、エル兄様にしがみつく。

するとエル兄様が私をぎゅっと抱き抱え、リーベ兄様が私たちを隠すように立ってくれる。

お父様とお母様も眉をしかめて、私とエル兄様を囲むように立ってくれた。

「ああ！ 隠れないでください！ 大丈夫ですよ。少しお話がしたいだけですから」

「いやです！」

リーベ兄様の身長で前に立たれたら結構怖いはずなのに、彼は今も私を見ようとしているのか、  
私たちの周りをクルクルと回っている。

何この人！ 人を妖精だとか言って！ 違うから！ れっきとした人間だから！

というか、さっきからうちの家族から向けられている殺気にこの人は気づいていないんだろうか。  
私の本気で泣きだしたらどうなってしまうか分かるから泣くに泣けない。でも私の近くから離れてほしい。

もうやだ、ジュール兄様と合流したらここから逃げてやるんだから！

そう思った時だった。

「……プラント、僕の妹、泣かした？」

「ジュール兄様！」

「ジュール君！」

少年の後ろから現れたのはジュール兄様だった。

少年と私の声が重なる。

どうやら彼は、ジュール兄様の知り合いでプラント、というらしい。

ジュール兄様は彼——プラントさんが私を泣かそうとしたことに怒ってくれているようで、表情が硬い。

しかし、プラントさんは一切それに気が付いていないようで、にこにこ笑いながらジュール兄様に向かって言った。

「いいところに来ましたね！ 見てください！ 妖精さんが来てくれたんです！ すっごく可愛いでしょ。僕はスイートピーの妖精さんかなって思うんだけど君はどう思いますか？」

ス、スイートピーの妖精……？

「……フィルは、僕の妹」

「え？」

ジュール兄様が、プラントさんとリーベ兄様の間に入り、エル兄様に抱っこされている私の手を握る。

「この子……僕の妹。フィエルテ。妖精みたいに可愛いけど……ちゃんと人間」

「なんと！ こんなにも可愛らしいのに！ 同じ人間とはとても思えませんよ！」

私が人間だと納得できないのか、彼はさらに近づいてきてじっと見つめてくる。

興味のあるものを理解しようとしているのは分かるけど、まるで珍しい動物を見ているような視線が怖くて、体が強張ってしまう。

「っ……」

「プラント、それ以上近づいたら怒る……。フィル、怖がつてる」

また生理的な涙が溢れそうになって、ぐっところえたけど遅かった。

「うう、やだあ……」

エル兄様の腕に抱きつくようにして泣いてしまった。

基本家から出られない私は、見ず知らずの人にこんなにグイグイ来られたことがなくて純粹に怖い。ぎゅうつとしがみついてイヤイヤと首を振ると、三人のお兄様たちは心配そうに私の頭やら手やらを撫でたり握ったりしてくれる。

同時にお兄様たちとお母様たちの殺気がプラントさんに向く。

けれどやっぱり彼がそれに気が付いたそぶりはなかった。

それどころかまさか私が泣くとは思っていなかったのか、彼はトンボのような眼鏡をかちやちやと揺すってから、慌てたように両手を振った。

「ああ！ 泣かないでくださいっ！ すみませんでした……本当に妖精みたいにすごく可愛かったから、僕の植物大好きな気持ちが伝わって、ついに妖精が目の前に現れてくれたのかと思ったのです。ジュール君の妹さんだとは知らず……すみません」

早口に謝るその姿には特に私への悪意は見受けられない。

それが分かったのか、お兄様たちからも少しずつ警戒の色が薄れる。

ジュール兄様も、プラントさんのことは十分すぎるぐらいよく知っているだろう。

困ったような表情を浮かべて私を見た。

「フィル……プラントも、悪気はないから。許してくれる？」

それにこくんと頷き返す。怖かったけど、何か無理強いされた訳じゃないし、終始妖精さんって外見を褒められただけだ。

……ただ勢いがとんでもなかっただけで。

それに、植物の妖精に会えたって喜ぶくらい植物が好きなんだろうし、本当に悪い人じゃないんだろう。

そつとエル兄様に下ろしてもらって、プラントさんの前に立つ。

「フィエルテ・フリードリヒです。は、はじめまして！」

カーテシーをしてから顔を上げる。

すると、申し訳なさそうな顔をしながらプラントさんは自己紹介してくれた。

「僕の名前はプラント・スタイル。ジュール君の三つ上の学年で、同じ部活動を行っています」

「スタイル、さん？」

「プラントでいいですよ。ジュール君もそう呼んでますしね」

ちらつとジュール兄様を見ると、うんうんと頷かれたのでプラントさんと呼ばせてもらおう。

とはいえ、年上の先輩のため口のジュール兄様、それはいいのかな？

しかしスタイルってスタイル伯爵家だろうか？ それなら植物好きも納得だ。

ジュール兄様がよく出かける植物の大会は、スタイル伯爵家主催のことが多い。

それはスタイル伯爵家が植物を<sup>なりわい</sup>生業にする家だからだ。

スタイル伯爵家は領内の農産業に力を入れたことで発展した家で、この国に出回ってる野菜や果物はスタイル伯爵家領のものが多く、植物を使った商品や薬品もスタイル伯爵家がかしらの形で関わっていることが多い。

私がフォルトウナ商会でいつも買う果物もスタイル領産のものがほとんどだ。

そんな訳で、スタイル伯爵家は爵位がものすごく高い訳ではないけど、この国でも結構重要な位置にある。

まあ一族が植物にしか興味がなく、研究者気質で社交界にも滅多に出てこないから、産業面では重要とはいえ、家名としてはそこまで重要視していない貴族が多いらしいけどね。

私はプラントさんを見上げる。

緑色の髪の毛に、大きな眼鏡。

私が勉強をした貴族年鑑にはまだ彼の絵姿や詳細は記録されていなかった。つまり、彼はまだ成人していないのだ。

「フルーツ……」

「フルーツ？ ……好きなんですか？」

私が呟くと、プラントさんはすぐに私と視線を合わせるようにしゃがんでくれた。

やっぱりいい人だ。

私は大きく頷いて続けた。

「フォルトウナ商会さんから毎日届く果物は、スティル領からのものだよってお父様が言っていました」

「ああ、確かにうちからフォルトウナ商会に卸おろしていますね。なんでもこの頃はとても鼻屑ひいきにしてくださるお客様がいらっしゃるとかで……ウチとしても美味しく食べていただけるのは嬉しいですから、中でも状態や品質が最も優れたものをお渡しするようお願いしますが……もしかして、貴女あなたが？」

「いつも美味しいフルーツをありがとうございます」

砂糖漬けの甘味が好まれるこの世界で、フルーツを好む子供は珍しいとよく言われる。

だからきつと、これは私のことだろう。

ぺこりと頭をさげる。

するとプラントさんは眼鏡の奥の目を丸くして、ジュール兄様を振り返った。

「……まさか我が家からフリードリヒ公爵家おろに卸していたとは知りませんでした。ジュール君。君は知ってたんじゃないですか？」

それにジュール兄様はあいまいに微笑んで、返事をしなかった。

あ、この反応は知ってた感じですね。

最近だと、スティル領で果物を研究している人からと言って、フォルトウナ商会さんが持つてき

てくれるおまけが確かに増えていた。

それにすごくいい出来の果物とかをうちに優先的に持つてきてもらっていたし、ジュール兄様のお知り合いならもつと早くお礼を言えたのに。

それに美味しいフルーツを作る人って分かってたら怖い人とは思わなかったよ。多分。

多分ね、うーん、でもさっきの勢いはやっぱり少し怖いかも？

どっちなかなあ、と思いつつジュール兄様を見上げると、ジュール兄様はプラントさんからそっと私を隠すようにして呟いた。

「……うちのフィルと会わせなくなかった」

「どうしてですか!？」

「フィルは……可愛いし……植物のこともバカにしない……プラントも絶対、好きになる。それで……フィルが僕よりプラントを優先するようになったら……やだ」

お兄様……

相変わらずのシスコンが炸裂しちゃってます。

そもそも誰も彼もが私を好きになつたりするはずがない。

確かに見た目は優秀な遺伝子のおかげでそれなりにいい自覚はあるけど、人は見かけじゃないからね！

でもそれより、私がジュール兄様より他の人を優先するはずがない。植物のことだって、確かにプラントさんの家は研究で有名だけれど、家でも学校でも植物に対して熱心なジュール兄様はそ

れに負けないと思っている。教え方だって上手で、難しい話でも私が分かりやすいように話してくれるから興味をそえられる。毒にも薬にもなる植物を、正しく育て、正しく使う兄様は尊敬できる人だ。

私の家族は尊敬できる人しかない。自慢の家族だし、他の人なんかに目を向けている暇なんてない。

「……………大分話がそれちゃってるな。」

チラツとお父様とお母様の方に視線を向けると、あらあらと言った様子でジュール兄様を微笑ましそうに見つめていた。他の兄様たちも肩をすくめている。

「僕は自他ともに認める植物バカだからそんな心配は必要ないと思いますけどね……」

「あはは……」

私が苦笑していると、プラントさんも苦笑しつつ頬を掻いていた。それから、私に向かって手を差し出す。

「さて、怖がらせたお詫びがてら、僕とジュールの部活の紹介をさせてもらってもいいでしょうか？」

「はい、ありがとうございます！ ジュール兄様も、案内してくれますか？」

「……………うん」

私が大きく頷くと、ジュール兄様とプラントさんは微笑んで後ろを手で示した。今までは目に入っていなかったけれど、そこにあつたのは大きな温室だった。

ガラスがきらきらと日光を反射していて、眩しいくらいだ。

ジュール兄様に手を繋いでほしいと言うと、ちよつぱり驚いたような表情になってから、そつと手を繋いでくれる。

うん、やつぱり兄様の手が一番！

中へ入ると、ふわっと暖かい風が室内から吹いた。

ジュール兄様が所属しているのは植物研究部だそうだ。

植物園の一角を借りて植物の育成方法や交配により新しい性能ができるのか、より良い品質のものができるのかを調べる部活らしい。今回の文化祭では、魔法と植物を組み合わせたちよつとしたショーみたいなのを行ってるんだって。

温室の奥に進むと、室内には学者っぽい人から一般人らしき人たち、私と同じくらいの歳の子たちまでがたくさん集まっていた。

「わあ……………！」

よく見ると、その人たちが魔法を使うことで周囲の植物が成長したり、光ったりキラキラしててすごく綺麗だ。

その中で私の目に引くかかものがあった。一本だけ、皆の魔法からも外れてしまっているように、白い幹がくつたりとしている。

あの苗木は……？

「ジュール兄様。あの苗木の元気がないみたいです」

「ん。……あれは、名前が、分からない木なんだ。図鑑にも載ってなかった。あの苗木が魔力を吸って大きくなるのは分かったけど……。でも僕の魔力に少し反応するだけで……。あんまり大きくならない」  
なるほど。

他の人は魔法をかけてみたけど、木が反応しないのを見て離れていったのかもしれない。

ジュール兄様の魔法に反応するってことは、ジュール兄様と家族の私にも反応するかな？ 私の魔力は無尽蔵だから吸ってくれたら助かるんだけど……

「近づいてもいい？」

「いいよ、でも気を付けてね」

「はーい！」

とりあえず近くに寄ってみる。

すると苗木の葉がゆらゆらと揺れたかと思えば、私に触れた。同時に私の魔力が吸われている。あ、これいいな、なんだか、加減しながら吸い取ってくれている感じがする。

そっと苗木に触れてみたら、少しひんやりしていた。

葉は白いけど王宮の聖樹に少し似ている気がする。

「っ、大丈夫ですか!? 魔力を吸われてっ！」

「あら、フィル？ 大丈夫？」

魔力を吸われながら、この苗木と聖樹の似ているところを考えていたら、プラントさんがすごく

慌てながら走り寄ってきた。

逆にお母様は心配するというより、おっとりと大丈夫か聞いてくる。

ジュール兄様は私と苗木の様子を見て問題ないと思ったのか、むしろ二人の反応に首を傾げている。

「お母様、プラントさん、大丈夫みたいです！」

とはいえ心配させっぱなしはだめだね。

私は手に触れていた葉を一度離して、お母様とプラントさんに手を振った。

うん。改めて体を動かしても問題はないみたい。仮にちよつと多めに吸われても、また私の体にはすぐに魔力が満ちるし、この苗木は加減しながら魔力を吸い取ってくれているようだから大丈夫だろう。

安心したような表情の二人を見てから、もう一度指先で苗木の葉っぱに触れる。

するとすぐに葉っぱは私の指をくると巻いた。

んー、意思があるみたい……本当に聖樹に似ている。

あ。精霊に何か聞いたら分かるかな？

「お母様、リーンって近くにいますか？」

「あら、精霊とお話をしたほうがよさそうなのかしら？」

「まだ分からないですけど……ちよつと知りたいことがあって」

「分かったわ。『リーン』」

母様にお願いと、すぐにリーンを呼んでくれた。

『はいはい！ なあに？ アイシヤ。あ！ フィエルテこんにちは、さっきぶりだね！』

「リーン。こんにちはは、急にごめんね？ ちょっと聞きたいことがあって」

来てくれたリーンに挨拶をすると、後ろから驚く声が聞こえた。振り返ればプラントさんが声の主だったようだ。ジュール兄様の肩をガンガン揺らしている。ジュール兄様大丈夫かな？ 酔いそうだよ？

少しすれば本当に酔いそうだったのか、ジュール兄様は未だ自分を揺らし続けているプラントさんの手を掴んで、そのままプラントさんの顔にバンツとぶつけた。

いきなり顔に自分の手をぶつけられたもんだから、プラントさんがびっくりした顔でフリーズしてしまっている。

ジュール兄様にしては珍しい激しい行動だけど……よっぽどシェイクされる勢いがひどかったんだらう。

とはいえプラントさんの言いたいことは分かる。

まだ精霊と契約していない……できないはずの私が、母親とはいえ他人の守護精霊を呼び捨てにしていること。それに対して精霊が怒ることなく、挨拶を返してくれていることに驚いたんだらう。これは普通はありえないことなんだって。

精霊は契約した人間以外には基本的に無関心で、契約主以外の人間から話しかけられることを嫌う。もちろん契約主の家族や大切な人にはそれなりの態度を取るけど、それでも従順に返事を返す

ことはないそうだ。

くるんと目の前で回るリーンとはとても可愛いから怒ることなんてあるのかな？ と思ってしまいうけど、本来精霊の怒りは非常に恐ろしいそうだ。だから、あんなに初対面でぐいぐい来たプラントさんも、今度は私に話しかけずにジュール兄様に聞くことにしたんだらう。

……私が『愛護者』——精霊から愛されてしまう体質だっていうのはまだ発表してないから、プラントさんは知らないしね。

このことに関しては慎重に事を進めないと、周囲に混乱を招いてしまうかもしれないから発表されていいない。でもずっと隠し続ける訳にも行かないから学園に入学するまでには発表するはずだってお父様が言っていた。

貴族の世界も難しいことばかりだ。

むむむ……と思っていると、リーンが焦れたように私の方に翅を揺らして近づいた。

『フィエルテに呼ばれるのは何時でも大歓迎だよー！ それで？ 聞きたいことってなあに？』

わあ、ぐいぐい来る。

翅から散っている光る鱗粉が手に積もりそうになって、慌てて苗木を指で指し示した。

「この苗のことなんだけど」

『この若木がどうかしたの？』

「若木？」

すると当然のような答えが返ってきた。

何か知ってる感じだったので、木について質問してみると全部話してくれる。

「つまり、これは聖樹の苗木——そして世界樹の候補だよ！」

「「「えっ!」」」

聖樹といえど、王城にあった樹のことだ。子供たちが精霊からの好感度を確認するときに使われる『聖樹の間』に生えていた。でも世界樹って——？

私とお母様、ジュール兄様にプラントさんの声が重なる。お父様と兄様たちは声は洩らさなかったものの、目を大きく見開いている。

リーンに教えてもらったのはびっくりすることだらけだった。

この世界には魔力が溢れている。

そしてその魔力はこの世界のどこかにある世界樹が生み出しているのだそう。世界樹、というのは聖樹の祖先のようなもので、それはそれは強い魔力を持つ樹のことだ、とリーンは付け加えた。「ほとんど僕たちの間では、小さな妖精に聞かせる昔話みたいなものだけだね——」

そう言つて、リーンは世界樹と聖樹の物語を教えてくださいました。

昔々……神は世界を生み出してからしばらくして、たくさん種族が生まれ始めたこの地から離れることを決めた。

しかし神のいない世界では魔力がすぐ淀んでしまい、魔の者が溢れてしまう。

それを防ぐために、世界を作り上げた神々六人は力を使い一つの苗木を創りあげた。それこそ魔の力を浄化し、魔力を生み出すことができる世界樹の苗木だった。その苗木のおかげで、神様は一度こ

の世界を離れることができた。

やがて、その苗木——世界樹は育ち、この世界の基盤となった。

「小さな子に読み聞かせる寝物語のようなものだけど、精霊たちの間ではこれは本当のことだつて言われている」

静まり返った私たちに、リーンはそう告げた。

悪戯っぽい笑みを浮かべているのはいつもと変わらないけれど、どこかその眼には真剣さを帯びている。私がこくりと頷くと、リーンは微笑んで物語を続けた。

「でもね、その世界樹にも限界があった。淀んだ魔力の浄化をいくらしても、魔の者は永遠に消えることはなかった。魔の者は誰かの、何かの負の感情から生まれてしまう。負の感情を抱くことはこの世界にいきものが存在する以上、止めようのないことだしね」

その言葉にお母様が少し俯く。

でも、そうだよ。悪意自体がこの世界から消えるのはきつとすぐ難しいんだろう。

「いくら六人の神が作ったとはいえ、世界樹が浄化し続ける魔力の淀みには限界があった。一度この世界を去った神は、そのことに気が付くと世界樹の候補となる種を作り出したんだ」

「それがこの苗木ってこと？」

「そう！ 候補となる樹をたくさん、たくさん作り出し、それが上手く成長すれば次代の世界樹となるはずだからと神様は言った。たとえ、世界樹になることはできなくても、数が多ければ力は弱



くとも魔の者からこの世界を守ることができると。そうして神々はたくさんの種をつくり、この世界のどこかに落とすとしたそう。それらが発芽し、成長したものは聖樹とよばれ——さらに成長したら世界樹となるらしい」

そこまで聞いて、誰かがごくりと唾を呑む音が聞こえた。

リーンはゆっくりと周りを見回す。

「聖樹が成長するには、たくさんの魔力と、この世界の生命の歴史なんて取るに足らないほど長い年月が必要なのだ。つまり、種が発芽するか、発芽してから無事成長できるかは分からない。そして王宮にある聖樹は、次代の世界樹候補ってわけ」

そう言われて、私も細い息を吐き出した。

まさかこの世界自体を支えているような樹の赤ちゃんだなんて……

魔力鑑定式の時に会った聖樹は枝が白色で、葉は薄紅色をしていた。

この苗木は今はずっと白だけど、いずれ色を帯びるのかもしれないとリーンは言う。

「……かもしれないっていうのは？」

「うーん、六人いる神様の力がバラバラに加わってしまったせいで、聖樹の苗木がどういう木になるか分からないし、しつかり成長できるかも分からないんだ」

「そうなのか……！　そもそも聖樹とはそのように成り立っていて……ああ、僕たちはあまりに無知だ……!!」

響いたのはプラントさんの感極まった声だった。

ついに辛抱できなくなったのか、彼の熱烈な視線がリーンを射貫<sup>いぬ</sup>いている。

確かにこれはこの世界を揺るがす大発見だ。きつとアル叔父様……もとい、国王陛下に話して、他国との会談を設けて慎重に進めなければいけない話。

だって、うちの国には既に大きくなった聖樹があるのだ。それに追加してもう一本、というのが外交的にはあまり好ましくないだろうことは、六歳児である私にさえ分かる。

うーん、私のことや我が家の聖水の事に関しても胃を痛めてたのに……アル叔父様大丈夫かな？　首を傾げていると、リーンもなぜか同じ動きをした。

どうしたの？　と聞くと、リーンは苗木の周りをぐるぐると飛びながら何かを確かめるように言った。

『……フィエルテ、もしかしてこの苗木に魔力をあげた？　フィエルテに似た魔力を感じるんだけど』

「え？　うん。でも、あげたと言うよりは近づいたら吸われちゃったよ？」

『うーん……』

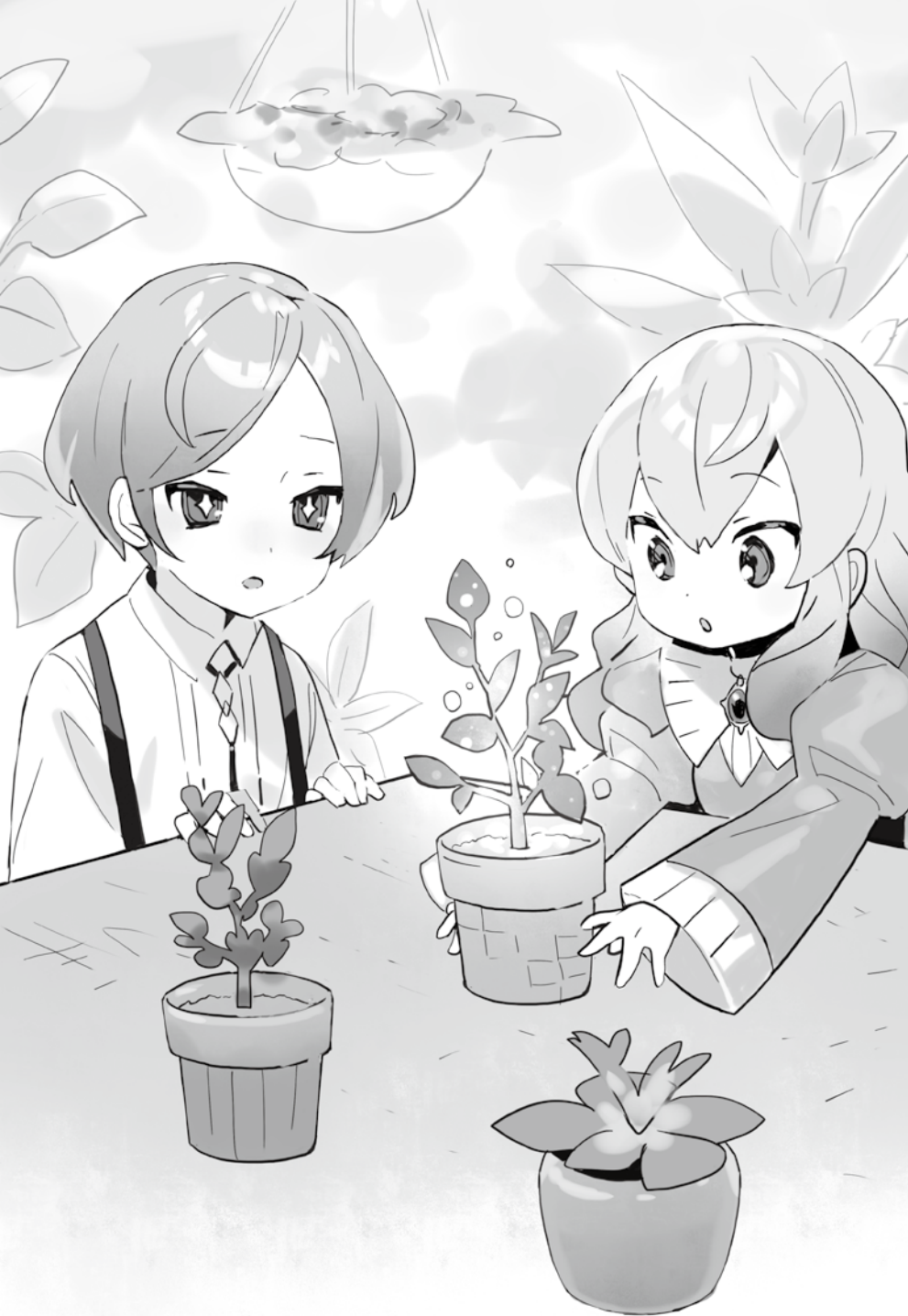
するとリーンは不思議そうに頭を捻りながら、また私と苗木を見比べるように飛び回る。

「リーン？　どうかしたの？」

『……ちよつと確認したいことがあるからまたね！』

そう言っただけでリーンは消えてしまった。

えっと、どうということ？



私はじつと苗を見つめてみる。

……あれ、なんか、ちよっとおつきくなってる？

というか私に似た魔力ってどういうこと？

もう一度、確かめるようにそっと触れると、今度は魔力を吸われなかった。だけどその代わりというように、葉の色が真っ白から、私の髪と同じピンクと紫のグラデーションにじんわりと染まっていく。

えっ！ 変わっちゃったよ？ 大丈夫！？

慌ててジュール兄様とプラントさんの方を振り向き、二人を交互に見る。二人は興奮しているのか、目がキラキラして頬が上気していた。

オタクだ……。確実に植物オタク。本当に好きなんだな。

中でも、さつきからずっと感動したそぶりを見せていたプラントさんは、私の肩を掴む勢いで両手をわななかせている。

「すごいです！ まさかこんなことが起こるなんて！」

「……プラント、これ、持ち帰っていい？」

「もちろん！ フィエルテ嬢の魔力に反応するようだし、苗木の経過観察はジュール君に任せますね！」

「うん」

それどころか二人は驚くようなチームワークで話し合いを進めてしまった。

ジュール兄様はそつと鉢植えを持ち上げているようだけど、いいのかな？ 一応世界樹候補の苗だよ？ 本来なら絶対お城に持つていつて嚴重保管とかになるやつなのではないだろうか。

うちの家族ならなんとかしただけけど、私はあまり目立ちたくない。

そう思いつつ、ちらつとお父様を見上げると、お母様と何か話していたようだ。私が聞くと、陛下のことなら問題ないと言つて苗木を家に持ち帰るように係の人に頼んでしまった。

ジュール兄様はいつも通りの静けさを取り戻していたけど、どこことなく頬が緩んでいる。とつても嬉しそうだ。

うーん、どんな私が目立っちゃいそうな要素が増えていつてる気がするよな……。生まれて六年でこれだもん、これからも絶対何かしらありそう。

とはいっても、私と、私の周りがチートすぎて起こっていることのような気がする。強すぎる力は災いを招きかねないし気をつけないと。

そうして、テキパキと苗木はどこかに運ばれていつてしまった。

それを見送つたら、お母様がジュール兄様に「他に面白そうなものはあるかしら？」と聞いている。

——お母様ならさっきの聖樹候補についての諸々を大事件じゃなくて、学園祭のちよつとした発表ぐらいに捉えていてもおかしくない。さすがと言えさすがだ。

ということ、それからみんなでジュール兄様の部活の出し物である植物と魔法のショーを少し観て、また全員で学校内を見て回ることにした。

あれ？ でもジュール兄様は外装担当とか言つてなかったっけ？ しつかり部活で出し物をやつ

ていたけど、結局外装は担当しなかったのかな？

うーんと考えていると、エル兄様がコツンとおでこをつついてきた。

「わっ、エル兄様？」

「また眉間にシワが寄つてたけどどうかしたの？」

「えと、ジュール兄様は学園祭の外装担当つて言つてなかったっけと思つて」

そう言つと、私の後ろを歩いてたジュール兄様が割つて入つた。

「外装……した」

そして、辺りの壁を指さす。

すると確かに入つてはいけなところの扉がしつかり隠されているのが見える。でもよく見ないと、そこに扉があるなんて分からない。それぐらいすごく綺麗な花飾りや、壁を隠しているアーチやオブジェが一体化している。

あ、ちゃんと外装もやつたんだ。

そこに元からあつたように自然に見えつ、でもお客さんがちゃんと目で見て楽しめるように綺麗にされていてすごい。そんな外装に携わつたジュール兄様つて本当に植物についてのプロフェツショナルなんだなあ。

わあ、と思わず声を漏らすと、ジュール兄様が淡く微笑む。

エル兄様はさらに付け加えるように、入口の方を指した。